

# 地球大破局からの脱出 1991年 廣済堂出版

深野 一幸 (ふかのかずゆき)

東京工業大学応用物理学科卒。工学博士。

以前から、予言、靈魂、超能力、UFO、宇宙人などの超常現象に興味をもち、独自の研究をつづけ、これらは「宇宙のしくみ」という観点からすべて統一的に説明できることを発見した。

地球が今そのまま進むとノストラダムスらの予言している「世紀末大破局」は、宇宙のしくみから必ず起こるとして、『199X年地球大破局』を著した。地球大破局を避けるには、宇宙エネルギーを利用する社会を早く作ることだとして、科学技術者の立場から宇宙エネルギーと宇宙のしくみを説く。

## 宇宙エネルギー発電機の先駆者ニコラ・テスラ

ニコラ・テスラ(1856~1943年)といっても、ほとんどの方がご存知ないであろう。しかし、宇宙エネルギー発電機を語る場合、今から100年も前に空間から電気を取り出す技術を開発していた宇宙エネルギー発電機開発の先駆者、ニコラ・テスラの名前を忘れるわけにはいかない。そこで、ニコラ・テスラについて少し詳しく紹介する。

ニコラ・テスラは、ユーゴスラビアのクロアチア共和国にあるスミリアン村で生まれている。父はギリシャ正教の牧師、母も代々牧師という家の出だった。また、祖母は超能力者だったともいわれている。

テスラは、稀有の天才発明家であるが、すでに物心ついたころから技師になりたいと思うようになり、身の回りにあるものを応用してさまざまな発明をしていた。わずか5歳でユニークな小型水車を発明しているのである。

また、テスラは、少年時代から幻視癖に悩まされていた。これは、強烈な光が突然閃いて、かつて実際に見たことのある物や景色の像が現実のもののようにあらわれたり、ある言葉が発せられると、言葉が喚起するイメージがいきいきと映し出されるという現象であった。

彼が17歳になって発明家の道に進むことになってからは、この幻視癖は逆に非常に役に立つことになった。というのは、あるアイデアが浮かぶと、実験することなしにそれを具現化する図面や模型が目の前にありありと思い描けたからである。

### ◇エジソンと対立したテスラ

オーストリアのポリテクニック・スクールを中退したテスラは、1881年、ハンガリーのブダペストの国営電信局に勤めた。ここは2年足らずでやめ、あの発明王として知られるエジソンがパリに設立していた小会社コンチネンタル・エジソン社に職を変えた。

この時期に、テスラは交流誘導モーターを開発している。テスラの才能を見抜いた社長のバチェラーは、渡米してエジソンに会うことを勧めた。

やがてテスラは渡米し、エジソンのもとで働くことになったが、2人の性格がまるっきり正反対であるため、つき合いはうまくいかなかった。テスラは気むずかしく、理論家で、教養があり、ヒラメキで発明をする天才発明家であった。一方、エジソンは学校にはほとんど行かず、努力を積み重ねて発明家になった人であった。

たとえばテスラは、交流のよさを説明し交流モーターの普及を主張したが、直流モーターの普及を主張するエジソンとは真っ向から対立した。この交流対直流の戦い、すなわちテスラ対エジソンの戦いは、ナイアガラ瀑布電力会社が交流の採用を決定したことでテスラに軍配が上がった。こうして、交流が世界に普及していったのである。

#### ◇自然界のエネルギーを引き出したテスラ

やがて、エジソンのもとを去ったテスラは、交流に関する特許をすべてウェスチングハウス社に売り、この資金で1887年、ニューヨークに自分の研究所を設立した。

テスラはここで、「テスラ・コイル」「拡大送信機」「地震発生装置」「無線操縦装置」「地球全体の照明装置」などの発明や研究を行なっている。これらは、一見何の関連もなく荒唐無稽のように思われるが、そうではなくテスラの発想は一貫していて、いずれも自然界のエネルギーを最大限に引き出すことにあった。

これは、少年時代、小さな雪の玉が転がっていくうちに家ぐらいの大きさにまで膨れあがるのを目撃したテスラ自身の体験がきっかけになっている。その光景を見たテスラは、「自然界には何と巨大なエネルギーが潜在しているのだろう。この自然界に潜む巨大なエネルギーをそのまま取り出すことができないだろうか」と考えた。

テスラは、空間には無限の自然エネルギーが潜在していて、これを取り出して利用すれば、人類は無限のエネルギーを手にすることができるることを、すでにことのときから確信していたのである。そして、この研究に取り組み、実際に「テスラ・コイル」や「拡大送信機」の発明で、そのことを実証したのである。

#### ◇テスラ・コイルと拡大送信機の発明

「テスラ・コイル」というのは特殊な変圧器で、高周波振動の電気的共鳴を利用して高電圧を得る装置である。この変圧器は、宇宙エネルギーを取り込めるもので、宇宙エネルギーを取り込む技術開発のヒントになる装置なので、やや専門的になるが、少し詳しく紹介してみよう。

普通の変圧器は、鉄心に1次コイルと2次コイルを巻いただけのものであるが、テスラ・コイルは、鉄心なしで1次コイルと2次コイルを同心円筒状にその比を大きくして巻き、1次コイル側の回路に、コンデンサー(蓄電器)と火花間隙をつけたものである。

1次回路に電池か交流電源によってコンデンサーを充電すれば、火花間隙に放電が起こり、その際1次回路には高周波の振動電流が発生する。すると2次回路には巻き線比以上の高電圧が発生する。

不思議なことに、この変圧器は入力よりも出力の方が大きくなるエネルギー増幅型の装置で、火花間隙の部分で外部空間から宇宙エネルギーを取り入れているようである。

なお、このテスラ・コイルは、宇宙エネルギー発電機の開発において重要なヒントになっているのみならず、1章で説明したハチソン効果に見られるように、反重力装置の原理においても重要なヒントを与えくれている装置である。

「拡大送信機」というのは、簡単にいうとテスラ・コイルの巨大なものを作り、これを使って電線なしで電力を送る装置であるが、電力輸送の過程で空間からエネルギーを取り入れるため、送電したときの電力より受電したときのほうが電力が増大するという画期的な装置である。

この装置は、送電するときに放電する超高周波電流を、地球の周りの空間に存在する宇宙エネルギーと共振するような振動数にすると、宇宙エネルギーを取り込んで、受電のときに電気が増大するしくみになっている。すなわち、電力を増大して送れる装置なのである。

テスラは、ニューヨークで400万Vの高電圧の発生に成功した。しかし、その後ニューヨークの研究所が火事で焼けたため、新しくコロナドに研究所を設けた。そして、そこでは1200万Vの高電圧を発生させ、無線での電力輸送に成功している。この拡大送信機で夜間に実験を行なうと、空中に色彩が乱舞し、大音響がしたという。そして、40km以上離れた所にある50Wの白熱ランプ200個を無線で点灯することに成功している。

#### ◇ 地球の定常波と世界システム

電力の無線增幅輸送に成功したテスラは、もし地球の定常波(非ヘルツ波)を見出しができれば、拡大送信機の高周波と地球の間に共鳴を起こすことができるはずだと考えた。それができれば、低コストで莫大なエネルギーを世界中に送ることができるだけでなく、全世界の電信電話網も完成し、地球規模の情報ネットワークができる。

テスラの理論によれば、地球の定常波から得られるエネルギーは距離の2乗に比例して、減衰することはないという。テスラはこのシステムを「世界システム」と名付け、これを実現するため、1901年、ロングアイランドに巨大な無線送電塔の建設をはじめたが、J.P.モーガンの資金援助打ち切りなどがあって、結局実現しなかった。

テスラの晩年は恵まれず、不遇のうちに死んでいる。そして、テスラの死後すぐにFBIの手でテスラの部屋から重要な研究資料が持ち去られている。そのため、テスラの研究資料に関しては肝腎な部分が残されていないというのが実情である。

#### 宇宙のしくみにはさまざまな特徴がある

宇宙は多次元世界と物質世界から構成されているが、宇宙のしくみには次のようないくつかの特徴があることが指摘されている。

#### ◇ 階層性があり相似構造である

ご存知のように、原子は原子核の周りを電子が回る構造をしている。そして太陽系は、太陽の周りを惑星が回る構造をしている。さらに太陽系全体は、別の太陽の周りを回転している。それらはまた別の星の周りを回転している。

このような構造で作られているのが銀河系である。たくさんの回転している銀河系が集まって作られたものが銀河団である。さらに銀河団が集まって宇宙が構成されている。このように宇宙には階層性があり、それぞれの構造は相似性がある。

また、人間と宇宙にも相似性がある。すなわち人間は、分子→細胞→組織→器官

→人間というように細胞から階層的に構成され、全体は脳のコンピューターで支配されて動いている。

一方宇宙は、衛星→惑星→太陽→別の太陽→銀河→銀河団→宇宙のように階層的に構成され、宇宙全体は宇宙の創造主が全体を支配し制御している。

こうしてみると、人間と宇宙とは構造的によく似通っていることがわかる。

#### ◇「渦」と「らせん」構造

宇宙のしくみの大きな特徴に「渦」、すなわち回転構造と「らせん」構造がある。地球に存在するものは、多くのものが渦を作り回転している構造をしているのである。たとえば、小さいものでは、電子は自分自身が回転していると同時に、原子核の周りを回っている。

地球も自転していると同時に、太陽の周りを回転している。太陽系全体も回転しているし、銀河系も回転している。さらに、銀河団も渦を巻いて回転している。

これらの回転系に特徴的なことは、いずれも全体は中央が脹らんで、外側は平たい円盤構造をしているということである。

さらに、多くの情報によれば、回転構造の多くは「らせん」構造だという。すなわち、同じところを回転するのではなく、「らせん」的に昇りながら回転しているのである。この「らせん」運動も宇宙の特徴の1つである。その特徴的なあらわれの1つが、遺伝子の「らせん」構造である。

#### ◇正と反のペアー構造

宇宙のしくみの1つに、ペアー構造というのがある。つまり、宇宙に存在するものは、多くが一対で作られているということである。すなわち、正があれば反があり、陽があれば陰があるということである。たとえば、電子があればその反粒子としての陽電子が存在し、男があれば女があり、火があれば水があり、白があれば黒があるというように、1つのものが存在すればその反対のものが存在している。——これも宇宙の大きな特徴である。

#### ◇宇宙は同じ素材でできている

物質世界の物質はすべて原子まで分解でき、原子はさらに陽子、中性子、電子に分解できる。したがって、物質世界の物質はすべて陽子、中性子、電子のみで構成されていることになる。

宇宙人からの情報によると、「物質世界の物質はすべて多次元世界の超微粒子(宇宙エネルギー)から作られている」ということであるから、陽子、中性子、電子の素粒子は多次元世界の超微粒子から作られているという結論が導き出される。

すなわち、多次元世界の物質も物質世界の物質も、すべて同じ材料からできていることがわかる。宇宙の構成要素は実にシンプルなのである。

## 多次元世界の究極物質は「単極の磁気粒子」

それでは、多次元世界の超微粒子は何かということになるが、多次元世界の各次元の物質も同一材料でできていると考えられ、それらは究極次元の究極粒子から構成されていると推定される。

そこで、その究極粒子が何かということになるが、これについては宇宙人がその答を教えてくれている。

「宇宙はあまねく、電磁気の海である」——あるいは「原子あるいは太陽系はすべて磁気学的法則という究極の法則のもとに動作している。我々のすべては磁気なしに電気がないことを知っています」

などの宇宙人の情報から、究極粒子は磁気、それも「単極の磁気粒子」であるということがわかる。磁石には必ずN極とS極があるが、単極の磁気というのはこれらの方の極の磁気のことである。

現在の物理学において、単極の磁気粒子はとらえられていない。磁石をいくら小さくしてもいつまでも磁石のままで、N極やS極の単極には分けられない。

素粒子の1つで、最小の電気をもつ粒子である電子も、それ自体が磁石になっている。このことは、電子自体が電子よりさらに小さい磁気粒子から構成されていることを示している。磁気粒子が極端に小さすぎて、現代科学ではそれをとらえていないのである。

磁気をもつ粒子は磁子であるから、磁気粒子を「磁子」と呼ぶことにする。

したがって、多次元世界の究極粒子は単極の磁気粒子、すなわち「単極磁子」であることがわかる。すなわち、宇宙は物質世界も多次元世界も、すべて「単極磁子」という同一の材料からできていることがわかる。

一方、究極粒子の大きさは、 $10^{-67}\text{cm}$ という情報があるので、多次元世界は、 $10^{-67}\text{cm}$ から $10^{-18}\text{cm}$ の領域の粒子の大きさの世界であることがわかる。ただし、 $10^{-67}\text{cm}$ という数字はあるが、これはもう無限に小さい粒子という意味である。

多次元世界は、次元の異なるたくさんの世界に分かれているが、この次元の違いは各次元を構成する基本粒子の大きさの違いによっている。

各次元は波長が異なるという表現もされているが、これは同じことである。超微粒子は粒子であるとともに波としての性質ももっているからである。

宇宙のしくみの特徴の1つに、宇宙の各世界は同一材料でできているという単純性があることから、多次元世界の各次元の基本粒子は、大きさは異なるが同じ材料でできていると考えられる。

したがって、多次元世界の各次元の基本粒子は究極次元の粒子の複合体、すなわち「単極磁子」の複合体になっていると考えられる。

## 物質世界の物質のしくみ

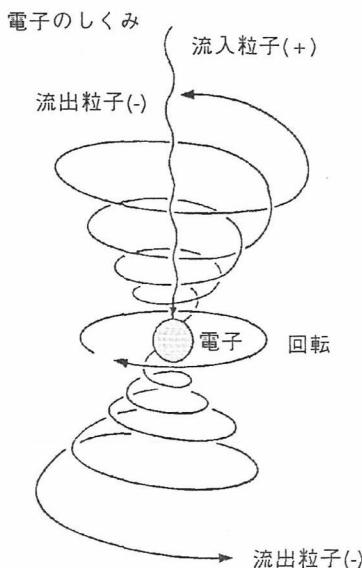
現在の科学の最大の弱点は、物質の究極が何であるかを解明できていない点にある。クォーク類や電子類が究極粒子と考えられているが、そうではない。さらにケタ違いに小さい超微粒子が存在している。現在の科学は、クォークや電子を検知することはできても、それよりケタ違いに小さい超微粒子を検知することはできない。そのため、物質世界を構成している究極粒子が何であるかがわかつていないだけでなく、多次元世界の存在に気がついていないのである。

宇宙人や宇宙の叡知からのさまざまな情報を総合すると、物質世界の物質のしくみは次のようにになっていることがわかる。

- ① 空間には正と負の超微粒子のさまざまな流れ(これが空間に無尽蔵に存在する宇宙エネルギー)がある。正または負の超微粒子(宇宙エネルギー)が渦を作つて凝集したものが、原子核や電子になって物質を作つている。
- ② 原子(電子や陽子や中性子)は、宇宙エネルギーの超微粒子が絶えず流入し、絶えず流出している回転流動体である。
- ③ 超微粒子のエネルギーは、渦を作つて中心に流入し、らせん円錐形状に流出している。また、超微粒子のエネルギーは流入するときと流出するときで、符号が変わる。

これからわかるることは、素粒子は宇宙エネルギーの超微粒子が絶えず流入、流出している回転流動体だということである。

たとえば、日本サイ科学会の関英男会長は、下図のような電子の構造模型を考えている。すなわち、電子は正の単極磁子が絶えず流入し、電子の内部を回転したのち負の単極磁子がらせん円錐状に流出している回転流動体だ、としている。これは、陽子や中性子の場合も同様と思われる。すなわち、陽子や中性子も宇宙エネルギーの超微粒子が渦を巻きながら流入して、らせん円錐状に流出している回転流動体だと推定できる。



なお現代物理学では、陽子はアップ・クォーク2個とダウン・クォーク1個から構成され、中性子はアップ・クォーク1個とダウン・クォーク2個から構成されているとしてい

る。もしそのとおりであれば、クォークが宇宙エネルギーの流入、流出する回転流動体になっていると思われる。

結局、電子、陽子、中性子はいずれも単極磁子が絶えず流入し、絶えず流出している回転流動体であることがわかる。電子、陽子、中性子は原子を構成する。したがって、物質世界の物質は、すべて多次元世界の物質である単極磁子から作られていることになる。

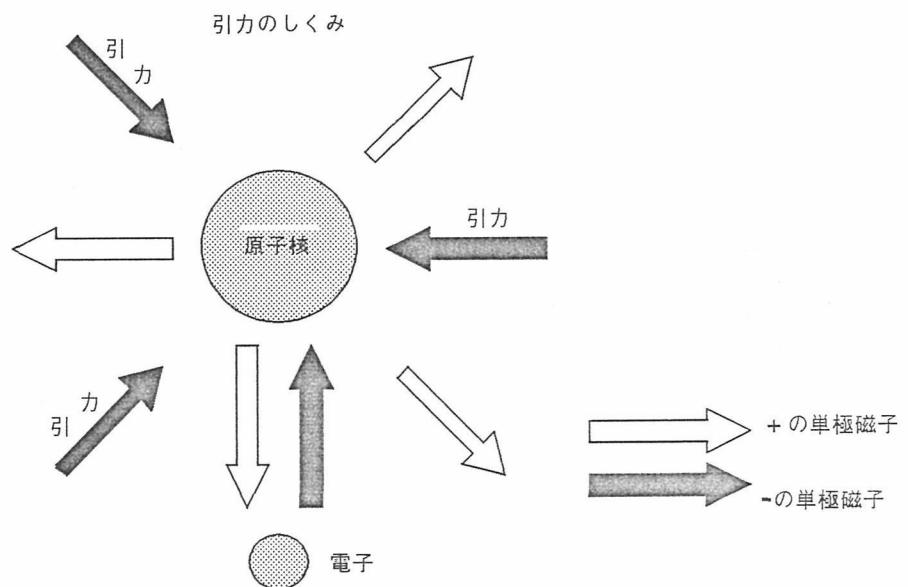
なお、電子が絶えず単極磁子の流入出する回転流動体の構造だとすると、さまざまな現象が説明できる。

たとえば、現在の電磁気学では電流を流すと導線の周りに磁界ができる現象を説明できていないが、この現象は、電流を流すと電子が一定方向に揃うため、一定の向きに放射されている単極磁子が一定方向の磁界を作るとして説明できる。

### 引力発生のしくみ

物質世界の物質のおよそのしくみがわかると、これまで解説されていなかった引力のしくみが自然にわかつてくる。多次元世界の概念を導入して、私の考えた引力のしくみを以下に記しておこう。

宇宙エネルギー発電機の開発においてしばしば反重力があらわれることから、引力は宇宙エネルギー、すなわち多次元世界の超微粒子と密接に関係していることがわかる。ヨガにおける人体の空中浮揚やUFOの飛行において見られるように、引力は制御できるのである。



また、引力は物質の質量に比例することから、引力は物質を構成している単極磁子に関係していることがわかる。

簡単にいえば、引力は単極磁子の物質への流れ込み、すなわち負の単極磁子を各物質が取り合うために、その取り合う力が引力になっていると推定される。

物質から単極磁子が出ていくとき、入ってきたときと符号が変わることであるから、流出粒子がすぐその物質の流入粒子になることはない。そのため、引力は

遠くまで作用するのである。

原子は、原子核と電子からなるが、原子の質量はほとんど原子核(+の電荷)の質量であるため、引力は原子核(陽子と中性子)への-の単極磁子の流れ込み、すなわち原子核の-の単極磁子の取り合いが引力になっていると推定できる。

原子核を出た+の単極磁子は、ごく1部は原子核を回っている電子の物質源として電子に流入する。電子から出た-の単極磁子は、原子核の物質源として原子核に流入する。原子核から出た+の単極磁子は、空間の単極磁子の海に戻っていく。

このしくみだと、空間は+の単極磁子ばかりになってしまふが、それは何らかのしくみで、+の単極磁子は-の単極磁子に戻りバランスが取れるのではあるまいか。

### 正と負は回転方向の違いによる

単極磁子に+と-の2種類があり、宇宙の究極粒子が正と反の1対構造になっていることから、もろもろの宇宙の物質は正と反のペアーの存在が非常に多い。

これが宇宙のしくみの特徴の1つであるが、では究極粒子のペアー構造は何に起因しているのであろうか。

さまざまな情報を総合すると、単極磁子の+と-は単極磁子自身の回転方向の違いにあるようである。右回転する単極磁子を+の単極磁子とすると、左回転する単極磁子は-の単極磁子ということになる。

単極磁子は、電子の回転流動体に入るときと出るときで符号が変わることであるから、簡単なしくみで+と-が変わることがわかる。

もし、回転の方向が変わって符号が変わるとすれば、この場合、回転軸が反転すれば回転の方向が変わり、これは比較的簡単な変化である。

恐らく、単極磁子の+と-は、回転方向の違いで発生しているものであろう。

### 太陽は冷たい星である

太陽系の惑星や衛星が、これまで考へてきたような環境の星ではないことがわかつたが、もっと驚くべきことは、太陽自体も現在考えられているような熱い星ではないということだ。

太陽が熱くないことは、有名な天文学者ハーシェルも「太陽は冷たい天体であり得る」と主張していた。もし太陽が熱いのであれば、太陽に近づけば近づくほど明くなり温度が上がるはずであるが、実際はそうではない。地上から上空へ上昇すれば上昇するほど暗やみとなり温度は低くなる。

以下はブラジルのダイノ・クラスペドンの接触した宇宙人が教えてくれたコンタクト情報である。

「熱のエネルギーは太陽からくるが、高周波の形でくる。これが熱波に変わるのである。この変換は惑星大気中で起こる。……発電機は冷たいが、その作る電流は高温を生じる。数百万度の熱が太陽内部にあるというのは、ナンセンスである。光度は

その熱に無関係である」

さらに、地球の各地で水爆戦争が起こるとどうなるかという質問に対して、次のように答えている。

「惑星の安定は大気層の組成による。水爆により大気層が変化すれば、光の発生が止まり、太陽の光度に影響するだろう。大気層はもはや太陽放射のフィルターの役目をしなくなり、太陽は黒変し、荘重な情景が見られよう。光速度が30万km/秒で一定であるとした理論が間違っていることを発見するのはそのときである。毎秒数100kmの紫外線のエネルギーに地球はさらされるであろう。

一方、強烈な太陽エネルギーにもかかわらず、光はまったくなく、さびた赤い光が地表近くにあるのみであろう。人類は恐るべき寒さに悩むが、化学線の輻射で、その肉体は熱い鉄を当てられたように燃えよう」

このように地球の大気がなくなると太陽は赤黒い太陽になり、熱が発生しなくなると宇宙人は教えてくれる。これまで、太陽は、水素がヘリウムになる核融合を超高温で起こしていると考えられてきた。しかし、太陽が熱い星でないとすると、太陽の核融合は低温で起こっていることになる。これを支持する情報がある。

1つは、最近の常温核融合の発見である。物理の理論では、核融合は超高温でないと起こらないとされてきた。それが現代科学の学問的常識であった。しかし、アメリカのフライシュマン・ポンズ博士とイタリアのジョーンズ博士のグループが別々に、普通の温度で核融合が起こることを発表した。

これは重水の電気分解を行なうと、過剰なエネルギーを中性子が発生し、常温で核融合が起こるという発見である。その後多くの科学者が追試を行ない、現在では間違いない常温で核融合が起こっていることが確認されている。

一方、生物が体内で元素転換、すなわち核反応を起こしていることがすでに発見されている。このことも、常温で核融合が起こることを支持している。

フランスの生物科学者ケルブランは厳重な実験を行ない、鶏などの体内でカリウムからカルシウムへ、カルシウムからマグネシウムへ、ナトリウムからカリウムへとさまざまな元素変換が起こっていることを発見している。さらに、日本の小牧久時博士はケルブランの業績を知り、微生物29種類を使い、厳重な実験を行なって、ナトリウムからカリウムへの元素変換が起こっていることを証明している。

いずれにしても、太陽はこれまで考えられてきたような超高温の星でないことは間違いない。

## 太陽エネルギーの半分以上は未解明

次に太陽のエネルギー伝達システムを考えるが、その前に「太陽ニュートリノ問題」という、太陽エネルギーの発生メカニズムに関する20年に及ぶ未解明の問題を説明しておこう。

地球に届く太陽エネルギーの量を測定すると、逆に太陽エネルギーの発生量が計算できる。そして、このようにして計算された莫大な太陽エネルギーがどこから発生し

ているかが、科学者の間でさかんに検討されたのである。

その結果、太陽の発生するエネルギーは、水素の熱核融合反応により放出されるエネルギーであろうと考えられたのだ、そして、これを確かめるために、その反応で作られるニュートリノという素粒子を観測することが行なわれてきた。

ニュートリノは電荷がなく、質量もほとんどないので、地球なども貫通するという素粒子である。そのため測定が難しく、他の粒子の影響を避けるために、数1000mの地下などで観測が行なわれている。これまでに、日本の神岡鉱山の地下など世界各地で観測されたニュートリノの数値は、いずれもモデル計算の1/2以下であった。

すなわち、観測の結果は、核融合が起こっているという証拠は得られたが、核融合の規模が計算値の半分以下となり、太陽の発生する熱の半分以上を説明できないのである。これが「太陽ニュートリノ問題」である。

要するに太陽の発生エネルギーの半分以下は、現在考えられている熱核融合反応では説明できていないのである。ということは、実際に太陽で起こっている反応は、地球の科学者が考えている超高温の熱核融合反応ではないということになる。

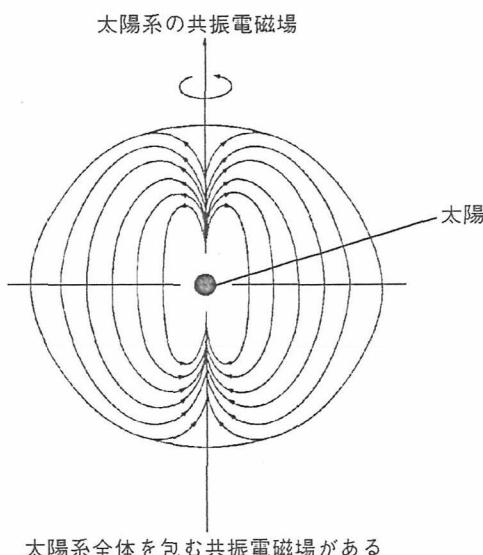
## 太陽系のエネルギー伝達システム

太陽から近い金星も、太陽から遠い海王星も、地球と同じような温暖な環境の星であることを有力な証拠をあげて説明してきた。では、どのようなしくみで太陽から太陽系内の各惑星に遠近に、関係なく一様に、エネルギーが送られているのであろうか。

これには、これまで述べてきた多次元世界の宇宙エネルギーが関与していると、私は推定している。

いろいろな情報を総合すると、この宇宙エネルギーも、2つの違った形で各惑星に伝達されているようである。

1つは、共振電磁場間の宇宙エネルギーの伝達である。共振電磁場というのは、1章で説明したように、これは各天体がほぼ球状にもっているエネルギー場で、地球の科学者がまだ気がついていない宇宙エネルギーからできている。



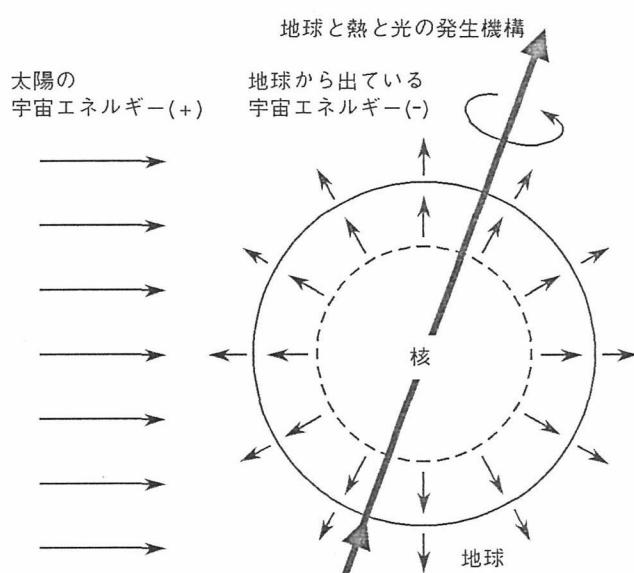
すなわち、地球をはじめとする惑星はそれぞれ球状の共振電磁場をもち、その衛星も共振電磁場をもっている。太陽は、太陽系全体を包む形の大きさの球状の共振電磁場をもっている。太陽系全体は別の太陽の周りを回っているが、その別の太陽もその太陽系を含む大きな共振電磁場をもっている。さらに、銀河系も銀河全体を包む共振電磁場をもっている。宇宙はこのように、相似で階層的な構造をしているのである。

そして、この共振電磁場は、共振電磁場間でエネルギーのやりとりを行なっている。このエネルギー移動は高いレベルから、低いレベルへ行なわれている。

太陽系の場合は、太陽系全体を包む太陽の共振電磁場から、各惑星の共振電磁場へ共振して宇宙エネルギーが伝達されているのである。

また、各惑星はこのエネルギーを、各惑星の回転軸に沿って取り入れていると考えられ、この宇宙エネルギーは各惑星の内部のマグマのエネルギーになっていると推定される。

もう1つは、太陽から各惑星に直線的に送られている宇宙エネルギーで、これは各惑星の大気に入って、各惑星内部から出ている宇宙エネルギーとぶつかって、熱と光になっているエネルギーである。



なお、地球上の熱と光は太陽から直接きているのではないことを、アメリカのカラグラ博士が、師のニール博士が宇宙の高次元から聞いた情報として次のように伝えている。「太陽からは、正の力線(高周波数の音波)が出ており、これが地球の大気および地殻から出る負の力線と交差して、熱と光が発生している。熱と光の強さは、太陽からの距離に関係するのではなく、太陽からの正の力線と地球から出る負の力線の間の交差角が関係する。その結果、赤道付近で非常に強くなり、極付近で弱くなる」

この情報は、科学者がとらえていないエネルギー線が太陽から送られてきて、これが、やはり科学者がとらえていない大気や地殻から出ているエネルギー線と衝突し、光と熱が発生すると伝えている。

なお、宇宙エネルギーは、光の電磁波のように距離の2乗に比例して減衰することのないエネルギーである。

先に、太陽の核融合は太陽の放射するエネルギーの半分以下しか説明できないとし

たが、残りのエネルギーは、太陽系全体が回っている上位の太陽の作る共振電磁場から、共振電磁場間の共振で太陽がエネルギーを受けていると考えれば説明できる。また、残り半分の核融合のエネルギーも現在考えられているような超高温ではなく、常温核融合が示すように低い温度で起こっているものと思われる。

また、核融合が超高速ではなく常温で起こるのは、宇宙エネルギーが関与しているからである。現在世界各地で行なわれている常温核融合の実験は再現性がないようであるが、宇宙エネルギーを関与させて実験を行なえば再現性よく反応が進むと私は推定している。いずれにしても、各天体の間にはこれまで科学者が気がついていない共振電磁場間のエネルギー移動という方法で大きなエネルギーのやりとりが行なわれているのである。